

## 887年仁和地震が東海・南海巨大地震であったことの確からしさ

## Certainty that the 887 Nin'na earthquake included great Tokai and Nankai events

# 石橋 克彦[1]

# Katsuhiko Ishibashi[1]

[1] 神戸大・都市安全研究セ

[1] RCUSS, Kobe Univ.

ユリウス暦887年8月22日(仁和三年七月三十日)の仁和地震が南海巨大地震だったことはほぼ確実だが、それが東海巨大地震も含んでいたことが確からしくなった。それを示唆するのは、信頼できる文献史料において、被災した国が30余より多かったと読めることである。また、この日に北八ヶ岳の大月川岩なだれが発生して千曲川に堰き止め湖を作り、それが翌年6月20日に決壊して下流域に大洪水を生じたというシナリオが、史料の検討、埋没ヒノキの年輪年代(光谷・河内)、考古遺跡などから描けるが、これも東海地震の発生を強く示唆する。京都の地震動が非常に長かったという記録も、仁和地震が東海・南海地震だったという推定と調和する。

ユリウス暦887年8月22日16時頃(仁和三年七月三十日申時)に発生した大地震(以下、仁和地震)は、「日本三代実録」(901年に完成した六国史最後の勅撰国史で信頼性が高い)の記述から、京都の強震動(震度5強くらい)、広範囲の地震動・津波災害、大阪湾の大津波を生じたことが知られ、四国沖・紀伊水道沖を震源域とする南海巨大地震だったことはほぼ確実である(宇佐美, 1996; 石橋, 1999)。この地震が熊野灘～遠州灘を震源域とする東海巨大地震も含んでいたという見方(例えば, Ando, 1975; 堀・尾池, 1999)に関しては、確かな根拠は示されていないが、石橋(1999)は、「類聚三代格」(平安時代後半に編纂された法令集)に収録されている仁和四年の詔勅において、地震被害を受けた国が30余より多かったと読めることを指摘し、「三代実録」が震災地を「五畿内七道諸国」と記しているのは誇張ではないだろうとして、東海・南海地震を含む宝永型である可能性を改めて示した(駿河湾は不明)。さらに石橋(1999)は、このときの東海地震によって北八ヶ岳の山体崩壊が生じたという仮説を提出した。最近、光谷拓実・河内晋平が、埋没ヒノキの年輪年代によって北八ヶ岳の山体崩壊が887年の秋口であることを明らかにしたので、上記仮説が補強され、仁和地震が宝永型であることがいっそう確からしくなった。以下にこの問題をレビューし、議論する。

888年6月20日(仁和四年五月八日)に信濃で大洪水災害があったことがほぼ確かである。これに関しては、「扶桑略記」(貴重な私撰の編年体史書だが問題もある)は887年8月22日(仁和地震の日)に山崩れ洪水があったと記し、「類聚三代格」の詔勅と「日本紀略」(成立年代・编者不詳だが、六国史を補う重要な歴史書)はそれを888年6月20日のこととしているが、史料の性質から、少なくとも洪水災害の日付は後者のほうが遙かに信用できる(「三代実録」は仁和三年八月廿六日の光孝天皇崩御で終わるが、仁和地震の日には信濃の災害を記さない)。なお、千曲川に沿う多くの考古遺跡で、洪水層に覆われた平安時代の水田跡があり、田植え時期を示唆する足跡が見られることから、洪水は6月20日だったというほうが8月22日より妥当だという(例えば、長野県埋蔵文化財センター, 1997)。河内(1983a, b)は、北八ヶ岳大月川岩なだれの地質学的研究(C14年代測定を含む)と史料の検討から、888年6月20日に北八ヶ岳の水蒸気爆発・山体崩壊が起こり、千曲川沿いに洪水災害が生じたとした。しかし、水蒸気爆発自体の地形・地質学的証拠は何も示されていないこともあって、石橋(1999)は、一つの可能性として、887年8月22日の東海地震の強震動によって大月川岩なだれが発生して千曲川に堰き止め湖をつくり、それが翌年梅雨時の6月20日に決壊して大洪水を引き起こした(両事件が文献史料には区別されずに記された)、という仮説を提案したわけである。この岩なだれ発生年が、前述のように埋没ヒノキの年輪年代で立証された。

鷹野(1965)は、大月川岩なだれが千曲川・相木川を堰き止めて“南牧湖”や“小海湖”を造ったのではないかと推測している。一般に、大規模な山体崩壊が起こった場合、そのとき直ちに洪水を起こすよりは、まず堰き止め湖が生じて、それが後日決壊して下流に大洪水を起こすことのほうが多いと思われる(1683年北関東, 1847年善光寺, 1854年安政東海, 1858年飛越などの諸地震)。したがって、大洪水が888年6月20日であるならば、大月川岩なだれはその前に発生したほうが自然だろう。文献史料の記述の相違については、「扶桑略記」の全面的な誤記とする見方が強いが、もしかすると六国史に続く幻の正史「新国史」(未定稿に終わって散逸)の仁和四年五月八日の条に、洪水記事とともにその原因が前年の地震・山崩れであることが書いてあって、それを参照した「扶桑略記」の編者が仁和三年七月三十日の地震記事に続けて信濃の山崩れを書き、続けて誤って翌年の水害のことまで書いてしまったというようなことがあるのかもしれない。

石橋(1999)は指摘していないが、「三代実録」に、京都で数剋(約2時間)を経験しても震なお止まなかったと書かれていることも、仁和地震が広大な震源域と長い震源時間をもつ多重地震で、しかも本震直後から大規模な余震が続発したことを窺わせ、東海地震と南海地震の両方だったという推定と調和的である。なお、遺跡の発掘

によって、愛知県稲沢市と静岡市で、仁和南海地震に対応する東海地震の存在が示唆されている（石橋，1999 を参照；同日かどうかはわからないが）。